



大岡越前

はじめに
時代劇のスターと言えば、皆さんは誰を思い浮かべますか？例えば水戸黄門に遠山金四郎、そして大岡越前といったところが、あがつてくるのではないのでしょうか。彼らはいずれも実在の人物であり、庶民に代わって悪を裁くヒーローとして人気を集めました。



大岡越前守忠相の墓 戒名は松運院興誓仁山崇義大居士(浄見寺境内)

大岡越前守忠相（たすけ）の裁判談は、亡くなった加藤剛さんの主演でテレビドラマ『大岡越前』となり、『水戸黄門』の全43部に次ぐ全15部が放送されました。このドラマが長寿シリーズとなった魅力は、何といっても機知と人情にあふれた大岡裁きにあり、その原案は「大岡政談」と呼ばれる史料群に収められています。

実母継母の御詮議の事

その中で私が好きな「実母継母の御詮議の事」をご紹介します。ある男が、何の落ち度もない妻を離縁して、愛人を後妻に迎えた。離縁された先妻は親里で女の子を産んだが、この子は器量良しの上にとても賢かったので、後妻はうらやましく思い、引き取るうとして奉行所に訴え出た。当然、先妻と争いになったが、どちらが実母か奉行所でも判断をしかねていた。その子

石地藏吟味の事

もう一つ、「石地藏吟味の事」を

の手をとり、引っぱり合うがいい。勝った方が実母である」と言った。先妻と後妻が左右に分かれて力いっぱい引つ張ると、娘は痛みに耐えかねて泣き出してしまった。すると、先妻は驚いて手を放してしまい、後妻は「そら見たことか。私がまことの母親だ」と勝ち誇るが、大岡は「こりゃ待て、この偽物め」とにらみつけた。「まことの母なら、痛みで泣き叫ぶ娘の手を引き続けるはずがない。その方は、他人であるから勝つことのみを考えたのじゃ」。こうして後妻は大岡裁きの前に平伏したのだった。

これはテレビシリーズでも、「白州に哭いた母二人」として放送されました。大岡裁きが如何なるものか、よく理解できる好例であると思います。

大岡は集まってきた白木綿を弥五郎に調べさせ、見事に犯人を捕らえたという。

フィクション「大岡政談」

この話は面白いのですが、さすがに実話だろうかかと疑ってしまっています。それもそのはず、私たちの知る『大岡越前』のもととなった「大岡政談」は、フィクションなのです。

「大岡政談」には幾つかの異本が存在しますが、それらを調べた国文学者の麻生磯次氏は、「江戸文学と支那文学」という論文の中で、異本7書に収録された141話のうち、重複と裁判談以外のものを除いた87話を調べたところ、「夥しい物語が、支那文学其他の先行作品と何等かの程度に於いて関係を有していることが明らかになったのである」としており、さらに「尚精査を加へたなら一層多くの影響関係が見出されることと思ふ」と述べ、そのほとんどが中国や日本の先行作品にオリジナルを求めることができることを示唆しています。

担当した事件は1編のみ

また、歴史学者の辻達也氏は、「大岡政談」の定型16編のうち、史実に基づくものは3編のみであることを明らかにしました。そして、このうち大岡が担当したのは1編だけで、他の2編は別の奉行が裁いた事

件だったと言います。つまりドラマの原案となった「大岡政談」には、ほとんど本人が関わった裁判などないということになるのです。ではなぜ、他作品のエピソードや別人が担当した裁判の話が、大岡裁きとして語られているのでしょうか。

江戸町奉行の職制

それでは、実在の大岡がどのような人物だったか見ていきましょう。実は彼は裁判官というよりも、八代將軍徳川吉宗とともに「享保の改革」を推し進めた政策官僚として実力を発揮しました。享保元年（1716）に吉宗が將軍になると、翌2年には江戸町奉行に取り立てられ、吉宗とともに改革へと乗り出していきます。

大岡が就任した江戸町奉行とは、江戸府内を支配し、行政・司法・警察の一切の業務をつかさどる強力な権限をもった役職であり、その中で彼が一番力を入れたのは、江戸の防災と財政問題でした。

防災都市プランナー

享保以前の江戸は、明暦の大火（1657）、天和の大火（1683）、元禄の大火（1698）、1704）などの大火に次々と見舞われた火災都市でした。そこで江戸町奉行となった大岡は、町家の耐火建築化をすすめること、火除け地を設ける



地方巧者の1人、川崎平右衛門の銅像 (東京都 府中市郷土の森博物館)

こと、町火消を設立することにより江戸の防災都市化を図ったのです。耐火建築については、火の粉によつて延焼しやすいため、茅葺きや杉皮葺きを廃止し、瓦屋根や土蔵造りなどへの改築を推奨しました。火除け地については、焼失した地域をそのまま更地にするなどしてこれに当て、延焼を防ぐための区画整理を行いました。そして町火消を創設し、およそ20町ごとに47の小組に分け、各組に「いろは」の文字を当てる有名な「いろは四十七組」の町火消組合を制度化したのです。

地方巧者の登用

また、享保の改革において重要な課題であった幕府財政の立て直しの手段として新田開発が進められ、関東では広大な武蔵野台地をはじめとした新田開発が行われることになりました。

このため大岡は、有能な農民などを農政官僚として登用し、地方巧者

をご紹介します。

呉服店の荷担ぎ弥五郎が、石地藏の前で一休みしてうたた寝していると、大事な白木綿を盗まれてしまった。困り果てて奉行所へ訴えでると、大岡は「その方は国土鎮護の仏である地藏菩薩の前だから、安心して居眠りしていたのだらう。その方の油断には違いないが地藏菩薩も己の役目を果たさぬとは許しがたい。早速召し取って吟味すべし」と家来に地藏を召し取るように命じた。

これは江戸中の評判となり、集まってきた野次馬に手伝わせて地藏を縛り上げ、荷車に乗せて奉行所に着くころには、幾百人もの人々が集まってきた。すると大岡は「裁きの場に勝手に入り込むとは何事だ」と言って怒り出し、門を閉めて一人残らず捕えてしまった。そして全員住所を記録して釈放したのちに、それぞれ白木綿一反ずつを罰金として差し出すように命じた。さて後日、

として開発事業や治水事業などに当たらせました。その中には、川崎宿の名主で農政意見書『民間省要』を著した田中丘隅、南関東の農政を担当した猿楽師の糞笠之助、農民出身で武蔵野新田世話役として新田経営にあたった川崎平右衛門などがいます。

大岡は地方支配を効率よく進めるために、封建時代にあつて身分にこだわることなく優秀な人材を登用し、彼らのユニークな出自と経歴を生かしたのでした。

おわりに

さらに貧窮者などの治療を行う小石川養生所の設立や、江戸の物価引下げのために巨大商人たちと対決するなど、江戸庶民の庇護者として活躍したのでした。

そうしたことを踏まえ、歴史家の大石慎三郎氏は著書『大岡越前守忠相』の中で、「大岡政談」が成立した理由を次の様に述べています。

「政策官僚の評価はじつはたいへんむずかしいのであるが、庶民は、むずかしい政策論などはむこうにおしやって、ただ庶民のために誠意をもって働いてくれたかどうかだけに観点をしぼり、それを名裁判という、もつとも単純明快かつ爽快でさえある話におきかえて大岡忠相を賛美したのである」

(文：江口知秀)